

プッチーニ

《妖精ヴィツリ (Il villano curato)》**は、イタリアの作曲家アントニオ・デ・ミーコ (Antonio De Meo) によって作曲されたオペラで、1828 年に初演されました。このオペラは、イタリアのオペラ・ブッフア (喜劇オペラ) の伝統に根ざした作品であり、喜劇的な要素と軽快な音楽が特徴です。

プッチーニは、1883 年 4 月、楽譜出版社ソソニーニョ社が主催する 1 幕物オペラのコンクール (ソソニーニョ・コンクール) があることを知り、師であるポンキエツリの薦めもあってそれに応募し、同年にオペラ『妖精ヴィツリ』の作曲に着手した。しかし締め切りが同年 12 月 31 日 であったため、プッチーニはオペラの楽譜を浄書することが出来ずそのまま送ったが、苦心の甲斐なく結果的に落選した。

しばらくして、プッチーニはポンキエツリの紹介でミラノのマルコ・サーラ邸で行われたパーティに出席し、この時『妖精ヴィツリ』の一部をピアノを弾きながら歌ったところ、偶然居合わせた作曲家アツリーゴ・ボーイトから称賛され、ボーイトの尽力によって 1884 年の 5 月 31 日 に地元のテアトロ・ダル・ヴェルメの劇場で初演されることになった。初演はアキッレ・パニッツァの指揮で行われ、大成功を収めたと伝えられている。プッチーニによれば、上演が終わると第 1 幕がアンコールされ、カーテンコールは 18 回にも及んだという。

初演後、プッチーニは楽譜出版社リコルディ社と契約を結んだが、社長のジュリオ・リコルディは 2 幕版に改訂することをプッチーニに提案した。2 幕版はこの年の 10 月に完成し、12 月 26 日 にトリノのテアトロ・レージョで初演された後成功し、そのひと月後の 1885 年の 1 月 24 日 にミラノ・スカラ座でも上演が行われた。

- 原作はスラヴ地方の伝承物語『ウィリー』(アルフォンス・カール作)、ハイネの随筆集から
- 台本はフェルディナンド・フォンターナ

概要と背景

- 作曲者: アントニオ・デ・ミーコ
- 台本: アントニオ・デ・ミーコ(作曲家自身による)
- 初演: 1828年、イタリア

《妖精ヴィッリ》は、19世紀初頭のイタリアのオペラ・ブッフアの典型的な作品であり、当時のイタリアの社会や人々の生活を反映しています。オペラ・ブッフアは、日常生活の愉快的な状況や人間の愚かさを描くことが多く、軽妙な音楽と笑いを提供することが特徴です。

主要キャラクター

1. **ヴィッリ(Villi)**: 主人公で、村の若者。真面目で一途な性格の持ち主で、村の人々から信頼されています。
2. **ミリーナ(Milina)**: ヴィッリの恋人で、美しく、恋に落ちることを夢見ている。ヴィッリとの関係が物語の中心となる。
3. **ルカ(Luca)**: ヴィッリの友人で、彼の助言者。ユーモアがあり、物語に軽快な要素を加える役割を果たす。
4. **他の村人たち**: ヴィッリとミリーナの関係に絡む、村の住人たち。彼らのコミカルな行動が物語を盛り上げます。

あらすじ

第一幕

- 物語は、田舎の村で始まります。ヴィッリは村の若者で、彼の恋人ミリーナとの関係が物語の中心です。彼はミリーナにプロポーズし、結婚の約束を交わしますが、村の周囲でいくつかの騒動が発生します。
- 村人たちは、ヴィッリの計画に対して疑念を抱き、彼の行動に干渉します。ヴィッリはこれに対して真面目に対処しようとしませんが、状況は次第に混乱していきます。

第二幕

- 物語が進行する中で、ヴィツリとミリーナの関係に試練が訪れます。ヴィツリの誠実さと村人たちの期待が交錯し、彼の計画が崩れそうになります。
- 最終的には、ヴィツリとミリーナが困難を乗り越え、二人は結婚することに決めます。村人たちも二人の幸せを祝福し、物語はハッピーエンドを迎えます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《妖精ヴィツリ》の音楽は、アントニオ・デ・ミーコの典型的なスタイルを反映しており、軽快でリズムカルな旋律が特徴です。オペラ・ブッフアの伝統に則り、コミカルな状況に合った音楽が用いられ、キャラクターたちの個性を引き立てます。
- **テーマ:** このオペラの主要テーマは、愛、誠実さ、そしてコミカルな状況の中での人間性です。ヴィツリとミリーナの愛の物語を通じて、日常生活の中での人々の行動や考え方が描かれ、観客に楽しさと笑いを提供します。

舞台演出と視覚的要素

- **田舎の風景とコメディックな演出:** 《妖精ヴィツリ》の舞台は、田舎の村の風景が中心であり、物語のコミカルな要素を強調するために視覚的に楽しい演出が行われます。村人たちの騒動やユーモアのあるシーンが、舞台上での展開を引き立てます。

結論

《妖精ヴィツリ》は、アントニオ・デ・ミーコによるオペラ・ブッフアの代表作であり、19世紀初頭のイタリアの喜劇オペラの伝統を色濃く反映しています。軽妙な音楽とコミカルな状況が、観客に楽しさと笑いを提供し、ヴィツリとミリーナの愛の物語を描いています。このオペラは、当時の社会や人々の生活を反映した作品であり、現在でもオペラ・ブッフアの中で重要な位置を占めています。

			初稿:1884年5月31日,テアトロ・ダル・ヴェルメ(ミラノ)
1884	1	F.フォンタナ	第2稿:1884年12月26日,トリノ王立歌劇場
	幕	ナ	第3稿:1885年1月24日,スカラ座
			第4稿:1889年11月7日,テアトロ・ダル・ヴェルメ

《エドガール(Edgar)》**は、イタリアの作曲家フルジェンツォ・ブズツェティ(Frenzel Buusetti)によって作曲されたオペラで、イタリアのロマン派オペラの一例として知られています。ブズツェティは、イタリアのオペラ界で広く認識されている作曲家ではないですが、《エドガール》は彼の代表作の一つとされています。

概要と背景

- **作曲者:** フルジェンツォ・ブズツェティ(Frenzel Buusetti)
- **台本:** ジョヴァンニ・バッティスタ・シンフォニ(Giovanni Battista Sinfoni)
- **初演:** 1850年、ミラノ

《エドガール》は、ロマン派オペラの要素を取り入れた作品で、愛と運命をテーマにしたドラマティックな物語が展開されます。オペラは、その音楽の深さと感情的な表現で高く評価されています。

主要キャラクター

1. **エドガール(Edgar):** 主人公で、情熱的な貴族。彼の愛と運命に翻弄される人生が物語の中心です。
2. **ジュリア(Julia):** エドガールの恋人で、物語の主要な感情的な要素を提供します。彼女の愛と苦悩が物語を引き立てます。
3. **ルカ(Luca):** エドガールの友人で、彼の計画に巻き込まれる重要な役割を果たします。
4. **エリザ(Elisa):** エドガールとジュリアの関係に絡むキャラクターで、物語の進行に影響を与えます。

あらすじ

第一幕

- 物語は、エドガールとジュリアのロマンティックな関係から始まります。二人は深く愛し合っているが、エドガールの家族や社会的な圧力が二人の関係に影響を与えます。
- エドガールは、家族の期待や社会の圧力と戦いながらも、ジュリアとの愛を守りたいと考えています。しかし、彼の状況は次第に複雑になり、二人の関係は試練に直面します。

第二幕

- エドガールとジュリアの関係は、さらに厳しい状況に直面します。エドガールの家族や社会からの圧力が増し、彼の選択が試されます。
- 物語の中で、エドガールとジュリアの愛がどのように変化し、どのような困難に直面するかが描かれます。エドガールは、自分の愛と運命に対してどう対処するかを考えながら、物語が展開します。

クライマックス

- 物語の終盤では、エドガールとジュリアの関係が最も厳しい試練に直面します。彼らの愛と運命が交錯し、ドラマティックな展開が繰り広げられます。
- 最終的には、エドガールの選択と彼の運命が決まる場面が描かれ、物語は感動的な結末を迎えます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《エドガール》の音楽は、ロマン派オペラの特徴を反映しており、深い感情とドラマティックな要素が強調されています。ブズツェッティの音楽は、キャラクターたちの感情や状況を豊かに表現し、オペラのドラマを引き立てます。
- **テーマ:** このオペラの主要テーマは、愛、運命、そして社会的な圧力です。エドガールとジュリアの愛が物語の中心にあり、彼らの関係が試練や困難

に直面しながら展開します。物語は、愛と運命がどのように交錯し、キャラクターたちの人生に影響を与えるかを描いています。

舞台演出と視覚的要素

- **ロマンティックな演出:** 《エドガール》の舞台は、19世紀のロマン派オペラの伝統に則り、感情的な状況やドラマを強調するために視覚的に豊かな演出が行われます。舞台美術や衣装は、物語の時代背景やキャラクターの感情を反映し、オペラのドラマを引き立てます。

結論

《エドガール》は、フルジェンツォ・ブズツェティによるロマン派オペラの代表作であり、愛と運命のテーマがドラマティックに展開される作品です。ブズツェティの音楽がキャラクターたちの感情と状況を豊かに表現し、物語の深さを引き立てています。このオペラは、ロマン派オペラの特徴を色濃く反映し、感動的な物語と音楽を提供します

			初稿:1889年4月21日,スカラ座
			第2稿:1891年9月5日,テアトロ・デル・ジリオ(<u>ルツカ</u>)
1889	3	F.フォンタナ	第3稿:1892年1月28日,テアトロ・ムニチパーレ(<u>フェラーラ</u>)
	幕	ナ	第4稿:1905年7月8日,テアトロ・コロン(<u>ブエノスアイレス</u>)

《マノン・レスコー (Manon Lescaut)》は、イタリアの作曲家ジャコモ・プッチーニによる全4幕のオペラで、アベ・プレヴォーの小説『マノン・レスコー物語』に基づいています。このオペラは、プッチーニの出世作であり、彼のオペラ作曲家としての名声を確立した作品です。プッチーニは《マノン・レスコー》で初めてその劇的な才能と感情豊かな音楽を全面的に発揮し、以後の傑作へとつながる道を開きました。

概要と背景

- **作曲者:** ジャコモ・プッチーニ
- **台本:** ルッジェーロ・レオンカヴァッロ、ルイージ・イッリカ、マルコ・プラガ、ドメニコ・オルテスなど、複数の作家が関わっている。具体的な台本の作成者は特定されていないが、プッチーニ自身も深く関与している。
- **初演:** 1893年2月1日、イタリアのトリノ、レージョ劇場
- **設定:** 18世紀のフランス

《マノン・レスコー》は、愛と欲望、運命と破滅の物語を描いており、特にヒロインのマノンのキャラクターが物語の中心に据えられています。プッチーニは、この作品で感情の高まりと劇的な展開を音楽で巧みに表現し、後の《ラ・ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》といった作品の礎を築きました。

主要キャラクター

1. **マノン・レスコー:** 主人公。若く美しい女性で、贅沢と愛情の間で揺れ動く。自由奔放でありながらも純粋な愛を求める。
2. **デ・グリュ:** マノンの恋人。貴族の若者で、純粋で情熱的な性格。マノンへの愛に全てを捧げる。
3. **レスコー:** マノンの兄で、兵士。マノンを金銭的に支えるが、彼女の恋愛に対して無関心。
4. **ジェロンテ・ディ・ラヴォワール:** 高齢の財産家。マノンに魅了され、彼女を愛人にしようとする。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: アミアンの街

- 舞台は18世紀のフランス、アミアンの広場。学生や町の人々が集まり、賑わいを見せている。マノンと家族と共に修道院へ向かう途中で、この町に立ち寄ります。彼女の美しさが周囲の注目を集めます。

- 若き貴族デ・グリユーはマノンに一目惚れし、彼女に駆け落ちを提案します。マノンは彼の情熱に心を動かされ、共にパリへ逃げることを決意します。
- 一方、ジェロンテはマノンを愛人にしようと企み、彼女を連れ去るために馬車を手配していました。しかし、デ・グリユーとマノンが馬車に乗って逃げたことを知り、激怒します。

第2幕: パリのジェロンテの邸宅

- マノンはジェロンテの邸宅で贅沢な暮らしを送っていますが、彼女の心は満たされていません。彼女はデ・グリユーへの愛を忘れられず、贅沢な生活と純粋な愛の間で葛藤しています。
- デ・グリユーが現れ、二人は再会します。マノンはデ・グリユーへの愛を再確認し、彼と共に逃げることを決意します。
- ジェロンテはマノンの裏切りに気づき、警察を呼びます。マノンは逮捕され、デ・グリユーも無力さに打ちひしがれます。

第3幕: ル・アーヴルの港

- ル・アーヴルの港にて、マノンは他の女囚たちと共にアメリカへの追放を待っています。デ・グリユーは彼女を救おうと試みますが、力及ばず、絶望に打ちひしがれます。
- デ・グリユーはマノンのそばにしようと決意し、船の船員になるために懇願します。二人は互いに愛を誓い合い、希望を見出そうとします。

第4幕: ルイジアナの荒野

- マノンとデ・グリユーはルイジアナの荒野をさまよっています。マノンは飢えと疲労で弱り果て、絶望的な状況に陥っています。デ・グリユーは水を探しに行きますが、戻ってきたときにはマノンは力尽きて死にかけています。
- マノンはデ・グリユーの腕の中で最後の力を振り絞り、彼に愛を告げながら息を引き取ります。デ・グリユーは彼女の死に絶望し、孤独の中で嘆き叫びます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《マノン・レスコー》は、プッチーニの劇的で感情豊かな音楽が際立っています。愛と欲望、希望と絶望の間で揺れ動く登場人物の感情を、プッチーニはオーケストラと声楽で巧みに表現しています。特に、デ・グリュエのアリア「夢のように (Donna non vidi mai)」やマノンの嘆きのシーンは、オペラの感動的なハイライトです。
- **テーマ:** このオペラのテーマには、愛と欲望、道徳と快楽の葛藤、運命と破滅が含まれています。マノンには贅沢な生活を求めるがために純粋な愛を犠牲にし、最終的にはその選択が破滅を招く結果となります。また、異性間の愛と社会的な立場や道徳的価値観の間に生じる緊張感も、作品の重要なテーマとなっています。

舞台演出と視覚的要素

- **リアリズムと感情表現:** 《マノン・レスコー》の舞台演出は、18世紀のフランス社会のリアリズムを重視しつつ、登場人物の感情を強く表現することに焦点が当てられます。特に、マノンの豪華な生活と、その後の荒野での絶望的な状況の対比が視覚的にも劇的な効果を生み出しています。

結論

《マノン・レスコー》は、プッチーニのオペラ作曲家としての才能を証明する作品であり、その後の名作に続く重要な一歩となりました。情熱的で感情豊かな音楽、劇的なストーリー、そして人間の欲望と愛の複雑な関係を描くテーマは、聴衆に強い印象を残します。今もなお、世界中のオペラハウスで頻繁に上演され、愛され続けている作品です。

1893	4 幕	L. イツリカ, G. ジャコ ーザ <u>L. レオンカヴァッロ</u>	初稿: 1893年2月1日, トリノ王立歌劇場 第2稿: 1893年12月21日, テアトロ・コッチ ア (<u>ノヴァーラ</u>)
------	--------	---	---

M.プラーガ,D.オリ
ーヴァ

《ラ・ボエーム (La Bohème)》**は、ジャコモ・プッチーニ作曲の4幕からなるオペラで、1896年にトリノで初演されました。このオペラは、19世紀のパリのボヘミア人たちの生活を描き、愛、友情、貧困、芸術などのテーマを織り交ぜた感動的な作品です。以下に《ラ・ボエーム》の詳細な内容とその背景について説明します。

概要と背景

- **作曲者:** ジャコモ・プッチーニ
- **台本:** ルイージ・イッリカとジュゼッペ・ジャコーザ(アンリ・ミュルジェールの小説『ボヘミアン生活の情景』を原作にしている)
- **初演:** 1896年2月1日、イタリアのトリノ、レッジョ劇場
- **設定:** 19世紀半ばのパリ

主要キャラクター

1. **ロドルフォ:** 詩人。情熱的で感受性が豊か。ミミと恋に落ちるが、彼女の健康を心配する。
2. **ミミ:** 若い刺繍職人で、繊細で優しい女性。ロドルフォと恋に落ちるが、結核を患っている。
3. **マルチェット:** 画家でロドルフォの親友。ミュゼッタと複雑な関係にある。
4. **ミュゼッタ:** 活発で魅力的な女性。マルチェットの恋人だが、気まぐれな性格。
5. **ショナール:** 音楽家。ロドルフォやマルチェットの友人。
6. **コッリーネ:** 哲学者。ロドルフォの友人。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: 屋根裏部屋の貧乏詩人たち

- 舞台はパリのクリスマス・イブ。ロドルフォ、マルチェッロ、ショナール、コツリーネの4人の友人たちは、寒い屋根裏部屋で貧しい生活を送っています。彼らは暖を取るために詩の原稿を燃やしたりしながら、笑い合い、貧困の中でも明るく過ごしています。
- ショナールが食べ物とワインを持って戻ってくると、彼らは歓喜し、クリスマスを祝います。皆はカフェ・モミュスに出かけますが、ロドルフォは詩の仕上げを理由に一人部屋に残ります。
- その時、隣人のミミが現れます。彼女はロドルフォに助けを求めに来たのです。二人は偶然手が触れ合い、ろうそくの灯りが消えたことで暗闇の中、互いに手探りで探し合います。その過程で、二人は恋に落ち、外で待っている友人たちのもとへ一緒に向かいます。

第2幕: カフェ・モミュスでの賑わい

- 場所は賑やかなパリのラテン区、カフェ・モミュス。ロドルフォとミミ、そして友人たちは楽しんでます。突然、ミュゼッタが彼女の裕福な恋人アルチンドーロと共に登場します。
- ミュゼッタはマルチェッロの気を引こうとし、彼を誘惑します。アルチンドーロをうまく追い払い、ミュゼッタとマルチェッロは再び一緒になります。
- みんなが楽しく食事を終わると、アルチンドーロに勘定を押し付けて去っていきます。

第3幕: 別れの決断

- 冬の朝、パリ郊外の酒場の前。ミミがマルチェッロに助けを求めに現れます。彼女はロドルフォと別れるべきか悩んでいるのです。ロドルフォは嫉妬深く、ミミの健康も心配しています。
- ロドルフォも酒場から出てきて、マルチェッロにミミとの関係がうまくいかない理由を打ち明けます。彼はミミの病気を理由に彼女から離れようと考えていますが、実際には彼女を愛しているのです。
- ミミは隠れてロドルフォの言葉を聞いており、彼の本心を知ります。二人は再会し、冬が終わるまで一緒に過ごすことを約束します。一方、マルチェッロとミュゼッタは再び激しく言い争い、別れてしまいます。

第4幕: ミミの死

- ロドルフォとマルチェットは再び貧しい生活に戻り、失った愛を嘆いています。ショナールとコッリーネが戻ってきて、四人は再会を喜び合います。
- 突然、ミュゼッタが現れ、重病のミミを連れてきます。ミミの病状は悪化しており、彼女はロドルフォの元で最後の時間を過ごしたいと願っています。
- 友人たちはミミのためにできる限りのことをしようとはしますが、彼女の病気は手の施しようがありません。最後の瞬間、ロドルフォとミミは愛を再確認し合い、ミミは静かに息を引き取ります。
- ロドルフォはミミが亡くなったことに気づき、絶望の叫びを上げて幕が下ります。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《ラ・ボエーム》の音楽は、リリカルで感情豊かです。プッチーニは、キャラクターの内面の感情を繊細に表現し、劇的な瞬間には強い感情を引き出すメロディを用いています。特にミミのアリア「私が街を歩くとき (Mi chiamano Mimi)」やロドルフォの「冷たい手を (Che gelida manina)」などは、オペラの中でも特に有名な部分です。
- **テーマ:** このオペラのテーマには、愛と貧困、芸術と友情、そして人生の儚さがあります。若者たちの自由な生活や恋愛、そしてその裏に潜む病や死が描かれており、聴衆に強い感動を与えます。特にミミの死を通じて、愛の喜びと喪失の悲しみが強調されています。

舞台演出と視覚的要素

- **リアリズムの追求:** プッチーニは、登場人物たちの生活や感情をリアルに描写することを重視しました。衣装やセットも当時のパリの生活を反映しており、観客が物語に共感しやすいよう工夫されています。特にカフェ・モミュスでの賑やかなシーンや、寒々しい屋根裏部屋の描写が印象的です。

結論

《ラ・ボエーム》は、プッチーニの代表作の一つとして、オペラ愛好者にとって欠かせない作品です。その美しい音楽と感動的なストーリーは、観客に深い印象を与え続けています。愛と友情、そして喪失のテーマは普遍的であり、現代の聴衆にも強く響くものがあります。

1896 4 幕 L.イヅリカ,G.ジャコーザ 1896 年 2 月 1 日,トリノ王立歌劇場

《トスカ (Tosca)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全 3 幕からなるオペラで、イタリアオペラの傑作の一つとされています。この作品は、イタリアの劇作家ヴィクトリアン・サルドウの戯曲「ラ・トスカ」に基づいており、1900 年にローマで初演されました。以下は《トスカ》の詳細な内容とその背景についての説明です。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ
- 台本: ルイーゼ・イヅリカとジュゼッペ・ジャコーザ
- 初演: 1900 年 1 月 14 日、イタリアのローマ、コンスタンツィ劇場
- 設定: 1800 年、ナポレオン戦争時代のローマ

《トスカ》は、愛、政治、裏切り、そして悲劇的な結末が織り交ぜられた劇的な作品です。オペラは、ナポレオン戦争の混乱期におけるローマを舞台にしており、強烈な情熱と権力闘争が描かれています。

主要キャラクター

1. フロリア・トスカ: 有名な歌姫で、カヴァラドッシの恋人。美しく情熱的で、愛と信念に忠実な女性。
2. マリオ・カヴァラドッシ: 画家で、トスカの恋人。自由を求める革命家であり、貴族の脱走者アンジェロッティを匿う。
3. スカルピャ男爵: ローマの警視総監で、残忍で権力を握ることに執着している。トスカに欲望を抱き、カヴァラドッシを捕らえようとする。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: 聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会

- 場所はローマの聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会。政治犯アンジェロツティが教会に逃げ込んできて、逃亡の準備をしています。彼はカヴァラドッシの助けを借りて脱出しようとしています。カヴァラドッシは彼に協力することを約束し、隠れ家を提供します。
- その後、トスカが教会にやってきて、カヴァラドッシのモデルとして描かれている女性の絵を見て嫉妬します。カヴァラドッシはトスカを落ち着かせ、彼女を愛していることを誓います。
- 一方、スカルピア男爵が教会に現れ、アンジェロツティの追跡を開始します。彼はトスカにカヴァラドッシがアンジェロツティを助けた証拠をちらつかせ、トスカの愛情を利用して彼女を操ろうとします。スカルピアは、トスカが嫉妬心からカヴァラドッシを裏切るように仕向け、彼女を自分のものにしようとしてます。

第2幕: スカルピアの部屋

- 場所はスカルピアの部屋。カヴァラドッシはアンジェロツティを助けた罪で捕らえられ、スカルピアによって拷問を受けています。トスカは愛する人を救うためにスカルピアの元へ急ぎます。
- スカルピアはトスカに対して、カヴァラドッシの命を救う代わりに彼女の愛を要求します。トスカは最初は拒絶しますが、カヴァラドッシの苦しむ声を聞いて心を揺さぶられます。スカルピアは、カヴァラドッシの「偽の処刑」を約束し、彼の命を救うためにトスカを屈服させようとしています。
- トスカは最終的にスカルピアに従うふりをし、彼が処刑命令書にサインするよう要求します。その後、彼女はスカルピアの間を突いてナイフで彼を刺し殺します。スカルピアの死体を見下ろしながら、トスカは冷静に蠟燭を灯し、聖母像の前に十字を切ります。

第3幕: サンタンジェロ城の屋上

- 場所はローマのサンタンジェロ城の屋上。夜明け前、カヴァラドッシは処刑の時を待ちながら、愛するトスカのことを思い出し、「星は光りぬ (E lucevan le stelle)」と嘆きます。
- トスカが現れ、スカルピアの死と偽の処刑計画をカヴァラドッシに伝えます。彼女は、処刑が演技であり、カヴァラドッシが死ぬふりをするだけだと信じています。
- しかし、スカルピアは最後の裏切りをしており、カヴァラドッシは実際に射殺されます。トスカは真相に気づき、絶望の中でカヴァラドッシの遺体に寄り添います。兵士たちがトスカを逮捕しに来ると、トスカは城の屋上から飛び降りて自殺し、愛する人のもとへ向かいます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《トスカ》は、プッチーニの劇的な音楽の才能を発揮した作品で、力強いアリアとオーケストラの使い方が特徴です。特に有名なアリアには、トスカが第2幕で歌う「歌に生き、恋に生き (Vissi d' arte)」、そしてカヴァラドッシが第3幕で歌う「星は光りぬ (E lucevan le stelle)」などがあります。これらのアリアはキャラクターの感情を深く表現し、聴衆に強い印象を与えます。
- **テーマ:** オペラのテーマには、愛と犠牲、権力と腐敗、信仰と絶望が含まれています。トスカの愛と犠牲は純粹であり、スカルピアの冷酷な権力欲と対照的です。また、オペラは自由と抑圧、個人の信念の尊重といった政治的なテーマも持ち合わせています。

舞台演出と視覚的要素

- **リアリズムと緊張感:** 《トスカ》は、リアルな場面描写と緊張感のある演出が特徴です。特に第2幕のスカルピアとトスカの対決シーンは、視覚的にも心理的にもドラマチックで、緊張感が絶え間なく続きます。また、第3幕のサンタンジェロ城の屋上シーンは、広大な空とローマの風景が背景に広がり、オペラ全体の雰囲気を高めています。

結論

《トスカ》は、プッチーニのオペラの中でも特に人気の高い作品であり、その劇的なストーリーと美しい音楽が観客に深い感動を与え続けています。愛と犠牲、権力と裏切りが交錯する物語は、時代を超えて普遍的なテーマを探求し、聴衆の心に強く訴えかけます。そのため、世界中のオペラハウスで頻繁に上演され続けているのです。

1900 3 幕 L. イツリカ, G. ジャコーザ 1900年1月14日, テアトロ・コスタンツィ (ローマ)

《蝶々夫人 (Madama Butterfly)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全3幕からなるオペラで、異文化間の悲劇的な恋愛を描いた作品として広く知られています。このオペラは、アメリカ海軍士官と日本人女性との愛と裏切りを中心に展開され、プッチーニの感情豊かな音楽とともに、観客に深い感動を与える作品です。以下に《蝶々夫人》の詳細な内容とその背景について説明します。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ
- 台本: ルイージ・イツリカとジュゼッペ・ジャコーザ(ジョン・ルーサー・ロングの短編小説とデビッド・ベラスコの戯曲に基づいている)
- 初演: 1904年2月17日、イタリアのミラノ、スカラ座
- 設定: 20世紀初頭の日本、長崎

《蝶々夫人》は、東洋と西洋の文化の衝突、愛の儚さ、そして女性の悲劇的な運命を描いています。プッチーニは、異国情緒を反映するために日本のメロディや和音を取り入れ、作品に独特の音楽的色彩を与えました。

主要キャラクター

1. 蝶々さん(チャオ・チャオ・サン / マダム・バタフライ): 若く美しい日本人女性。アメリカ海軍士官ピンカートンと結婚し、彼を深く愛している。名前の「蝶々さん」は日本語の「チョウチョウサン」から来ている。
2. ピンカートン: アメリカ海軍の士官で、軽率で享乐的な性格。日本滞在中に蝶々さんと結婚するが、それを一時的な遊びとしか考えていない。
3. シャープレス: アメリカ領事で、良心的な人物。ピンカートンの行動を憂慮し、蝶々さんの将来を心配している。
4. スズキ: 蝶々さんの忠実な侍女で、彼女を支え続ける。
5. ゴロー: 結婚仲介人で、ピンカートンと蝶々さんの結婚を手配する。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: 蝶々さんとピンカートンの結婚

- 舞台は長崎の丘にある家。ピンカートンは、蝶々さんと一時的な結婚契約を結びますが、それを深刻に捉えていません。一方、蝶々さんはピンカートンを心から愛し、彼との結婚に人生を賭けています。
- 蝶々さんは家族や親族に対して、アメリカ人に改宗したことを告げ、これにより父親から勘当されます。
- 結婚式の後、シャープレス領事が現れ、ピンカートンに対して日本の習慣や蝶々さんの純粋な愛に対する配慮を促しますが、ピンカートンはそれを聞き流します。
- 蝶々さんとピンカートンは愛のデュエットを歌い、夜を共にします。

第2幕: ピンカートンの帰国と蝶々さんの待ち続ける日々

- 数年後、ピンカートンはアメリカに帰国し、蝶々さんは彼の帰りを待ち続けています。スズキはピンカートンが戻らないかもしれないと心配しますが、蝶々さんは彼が必ず戻ると信じています。
- シャープレスが蝶々さんの家を訪れ、ピンカートンからの手紙を読み上げようとしますが、蝶々さんはピンカートンがもうすぐ戻ってくると信じて、話を聞こうとしません。

- そこへ、ゴローが新たな求婚者であるヤマドリ公爵を連れてきますが、蝶々さんはピンカートンへの忠誠を誓い、拒絶します。
- 突然、港にアメリカの軍艦が入港し、ピンカートンの帰還を知らせる一発の大砲の音が響き渡ります。蝶々さんは喜び、家を花で飾り付け、夜通し彼を待ち続けます。

第3幕: 悲劇的な結末

- 翌朝、疲れ果てた蝶々さんが眠っている間に、スズキがピンカートンと彼のアメリカ人の妻、ケイトが到着するのを目撃します。スズキは真相を知り、ショックを受けます。
- シャープレスは蝶々さんにピンカートンがアメリカで再婚したことを伝え、彼の新しい妻ケイトが蝶々さんの子供を引き取りたいと願っていることを告げます。
- ピンカートンは自分の行動を後悔し、現場を立ち去ります。蝶々さんは事実を受け入れ、子供をピンカートンとケイトに託すことを決意します。
- 蝶々さんは、父の形見である短剣を取り出し、自ら命を絶ちます。彼女の最後の言葉は、愛する息子に「母はあなたを愛していた」と伝えるようにというものでした。ピンカートンが「バタフライ！」と叫びながら駆けつける中、幕が下ります。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《蝶々夫人》は、プッチーニのオペラの中でも特に美しく感動的な音楽で知られています。蝶々さんのアリア「ある晴れた日に (Un bel dì vedremo)」は、彼女の切なる希望と信仰を表現した名曲です。また、プッチーニは日本の民謡や旋律を巧みに取り入れ、東洋的な雰囲気音楽に与えています。
- **テーマ:** オペラのテーマには、愛と裏切り、異文化間の理解の欠如、そして女性の献身と悲劇があります。蝶々さんの純粋な愛と信念は、ピンカートンの軽率な行動との対比で際立ちます。また、異文化間の誤解や無理解が、悲劇を引き起こす要因として描かれています。

舞台演出と視覚的要素

- **東洋的な美意識:** 《蝶々夫人》の舞台装置や衣装は、日本の伝統的な美意識に基づいてデザインされています。特に、蝶々さんの家や庭の描写には、細やかな和風の装飾が施され、観客に異国情緒を感じさせます。また、蝶々さんが最後に命を絶つシーンでは、伝統的な「切腹」の姿勢が取り入れられ、日本の文化を尊重した演出がされています。

結論

《蝶々夫人》は、プッチーニのオペラ作品の中でも特に高い評価を受けており、その感動的なストーリーと美しい音楽が、観客に深い印象を残し続けています。蝶々さんの純粋な愛とその悲劇的な結末は、時代や文化を超えて普遍的な共感を呼び起こします。愛と裏切り、異文化の衝突というテーマは、現代の聴衆にも強く響くものであり、今もなお世界中のオペラハウスで愛され続けています。

			初稿:1904年2月17日,スカラ座
			第2稿:1904年5月28日,テアトロ・グランデ(ブレシア)
1904	3	L.イヅリカ,G.ジャコ	第3稿:1905年7月10日,コヴェント・ガーデン
	幕	ーザ	第4稿:1906年12月9日,オペラ=コミック座(パリ)
			第5稿:1920年12月9日,テアトロ・カルカーノ(ミラノ)

《西部の娘 (La fanciulla del West)》は、ジャコモ・プッチーニによる全3幕のオペラで、アメリカの西部開拓時代を舞台にした異色の作品です。このオペラは、1907年に発表されたデビッド・ベラスコの戯曲『The Girl of the Golden West』に基づいており、プッチーニはこの作品で西部劇の要素を取り入れた新たな音楽表現に挑戦しました。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ
- 台本: グアエルティエロ・シノポリとカルロ・ザンガリーニ
- 初演: 1910年12月10日、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場
- 設定: 1849年頃のアメリカ、カリフォルニア州のシエラネヴァダ山脈の金鉱

《西部の娘》は、プッチーニにとって新しいテーマへの挑戦であり、彼のオペラ作品の中でも特に独自性を持っています。作品には、アメリカ西部の荒々しい風景と、愛と正義を求める人々のドラマが描かれています。また、プッチーニはアメリカの民俗音楽やネイティブアメリカンの音楽からの影響を取り入れ、独特の音楽的色彩を作品に与えました。

主要キャラクター

1. ミニー: 主人公で、金鉱労働者たちにとって母親のような存在。強い意志を持ち、正義感が強く、彼女のサロンで働く金鉱労働者たちを守る。
2. ディック・ジョンソン(ラメレス): 本名はラメレス。指名手配中の強盗で、ミニニーに恋をする。彼の過去が物語の進行に重要な役割を果たす。
3. ジャック・ランス: 保安官で、ミニニーに恋心を抱いている。ジョンソンの正体を知り、彼を捕まえようとする。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: ポルカ・サロン

- 舞台はシエラネヴァダ山脈にある金鉱労働者たちの集まるポルカ・サロン。労働者たちはミニニーのサロンで酒を飲みながら過ごしています。彼らはミニニーを慕い、彼女を母のように思っています。
- 保安官のジャック・ランスはミニニーに恋をしており、彼女に愛を告白しますが、ミニニーは興味を示しません。
- ミニーのサロンに新しい来訪者ディック・ジョンソンが現れます。彼は実は指名手配中の強盗ラメレスですが、ミニニーは彼に魅了され、二人は互いに惹かれ合います。

- サロンの外では、ジョンソンを追う保安官たちが集まっており、緊張が高まります。しかし、ミニーのサロンにいる間はジョンソンが安全であることが分かります。

第2幕: ミニーの山小屋

- ミニーは自分の山小屋でジョンソンを待っています。彼が到着すると、二人は愛を語り合い、キスを交わします。
- その夜、ジョンソンの正体が発覚し、彼が指名手配中のラメスであることがミニーに知られます。彼女はショックを受けますが、彼への愛情を捨てられず、彼をかかまうことに決めます。
- ランスと他の保安官たちがジョンソンを追って小屋に現れ、緊張が高まります。ミニーはカードゲームでランスを挑発し、勝てばジョンソンを解放するように要求します。ミニーが勝利し、ジョンソンは解放されますが、ランスの憤怒が募ります。

第3幕: 森の中

- 翌朝、ジョンソンは再び捕まり、金鉱労働者たちに処刑される運命にあります。ミニーは彼の命を救うため、労働者たちに訴えます。
- ミニーは彼らに対し、ジョンソンの過去の罪を許し、彼を新しい人生に導くように求めます。彼女の説得力と愛情が労働者たちの心を動かし、最終的にジョンソンは自由になります。
- ミニーとジョンソンは新しい人生を共に歩むために旅立ちます。愛と許しのが勝利し、二人は新たな希望を胸に抱いて幕を閉じます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《西部の娘》は、プッチーニの他のオペラと比較しても特異な音楽スタイルを持っています。プッチーニはアメリカの民俗音楽やネイティブアメリカンの音楽からインスピレーションを受け、作品にユニークな音楽的要素を取り入れました。また、オーケストラの使用が豊かで、劇的な瞬間に強い感情を引き出す役割を果たしています。

- **テーマ:** 愛と正義、許しの力が主要なテーマとして描かれています。ミニーは愛と正義を体現するキャラクターであり、彼女の強い意志と人々を守るための行動が物語を進展させます。また、ジョンソンの過去の罪を許し、新たな人生を与えるというメッセージも重要です。

舞台演出と視覚的要素

- **西部劇的要素:** 《西部の娘》は、アメリカの西部開拓時代を舞台にしており、荒々しい自然や金鉱労働者たちの生活、山小屋やサロンなどの舞台設定が、視覚的に観客に西部劇の世界を感じさせます。特に、ミニーのキャラクターは西部劇のヒロインとしての魅力を持ち、彼女の強さと優しさが舞台において強調されます。

結論

《西部の娘》は、プッチーニのオペラ作品の中でも独自の位置を占めており、西部開拓時代の異色の舞台設定とドラマティックな音楽が特徴です。愛と正義、許しの力をテーマに、ミニーのキャラクターが中心となって物語が展開されます。プッチーニの音楽的才能が存分に発揮された作品であり、今もなお多くのオペラファンに愛されています。

1910 3幕 G.チヴィニーニ 初稿:1910年12月10日,メトロポリタン歌劇場
第2稿:1912年12月29日,スカラ座

《つばめ(La Rondine)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全3幕のオペラで、オペレッタ風の軽やかな要素と、プッチーニ特有の劇的なロマンティズムが融合した作品です。このオペラは、第一次世界大戦中に作曲され、1917年に初演されました。プッチーニの他のオペラとは異なり、悲劇的な結末ではなく、より軽やかでロマンチックな内容を持っている点が特徴です。

概要と背景

- **作曲者:** ジャコモ・プッチーニ
- **台本:** ジュゼッペ・アダーミ
- **初演:** 1917年3月27日、モンテカルロのオペラ座
- **設定:** 19世紀後半のパリとニース

プッチーニは、オペレッタ風の新しい方向性を試みたいという意図で《つばめ》を作曲しました。しかし、オペレッタとオペラの間のようなスタイルがオペラファンとオペレッタファンの両方から賛否を受け、当初は広く成功を収めることはありませんでした。それでも、後年になってその独特の音楽とストーリーテリングの魅力が再評価されるようになり、現代のオペラレパートリーにおいても一定の人気を持っています。

主要キャラクター

1. **マグダ・ド・シビリ:** 主人公の美しいパリの社交界の花形。リッチな銀行家ランビュルシュ伯爵の愛人だが、自由な愛を夢見ている。
2. **ルッジェーロ・ラストウッキ:** 若い学生で、純粋な心の持ち主。マグダに一目惚れする。
3. **ランビュルシュ伯爵:** 裕福な銀行家で、マグダの現在のパートナー。
4. **リゼット:** マグダの機知に富んだ召使い。ミラードに恋をしている。
5. **プリュニエ:** 詩人で、マグダの友人。リゼットとロマンティックな関係にある。

オペラの構成とあらすじ

第1幕: ランビュルシュの邸宅のサロン(パリ)

- 裕福な銀行家ランビュルシュの邸宅で、社交界の花形マグダが友人たちと過ごしています。詩人のプリュニエが「愛とは何か」についての議論を始め、マグダは自分の青春時代の愛の思い出に浸ります。
- マグダの召使いリゼットが、田舎からやってきた若い学生ルッジェーロを連れてきます。ルッジェーロはパリに魅了され、マグダに一目惚れします。

- その夜、マグダは変装してモンマルトルのカフェ「ブルールビー」へ向かいます。そこで彼女はルッジェーロと再会し、二人はお互いに強く惹かれ合います。

第2幕: モンマルトルのカフェ「ブルールビー」

- カフェでは多くの人々が集まり、楽しい雰囲気の中で歌と踊りが繰り広げられています。マグダは「ポレット」と名乗り、ルッジェーロと共に夜を楽しんでいます。
- プリュニエトリゼットもカフェに到着し、マグダの変装を見破りますが、二人のロマンスを応援することにします。
- マグダとルッジェーロは互いに愛を告白し合い、パリでの生活を離れて新しい人生を歩むことを決意します。彼らはカフェを後にし、新たな未来を夢見てニースへ向かいます。

第3幕: ニースのヴィラ

- マグダとルッジェーロはニースでの幸せな生活を楽しんでいますが、現実の問題が二人の間に影を落とし始めます。ルッジェーロは母親に手紙を書き、結婚の許可を求めますが、マグダの過去を知らない彼の母親は彼女を受け入れるかどうか不安です。
- ランビュルシュからの手紙が届き、マグダの過去がルッジェーロに明らかになります。ルッジェーロは彼女が彼の未来の幸せの妨げになることを恐れます。
- マグダは涙ながらにルッジェーロに別れを告げ、彼の幸せのために身を引くことを決意します。彼女は「つばめ」のように自由に飛び去り、過去の愛人関係に戻ることなく、新たな人生を求めて去って行きます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《つばめ》は、プッチーニの他のオペラと比較しても軽やかで明るい音楽が特徴です。ワルツのリズムが多用され、パリの華やかな社交界やカフェの活気を感じさせる音楽が響きます。また、ロマンティックなメロ

ディーが作品全体を通じて流れ、特にマグダとルッジェーロの二重唱はオペラのハイライトとなっています。

- **テーマ:** 《つばめ》のテーマは、愛と自由、夢と現実の間で揺れ動く人間の心情です。マグダは贅沢な生活を送りながらも、真実の愛を求めて自由を追い求める女性です。彼女の選択とその結果が物語の中心にあり、最終的には自己犠牲と別れが描かれます。タイトルの「つばめ」は、自由を象徴し、マグダの心の自由と彼女の運命を暗示しています。

舞台演出と視覚的要素

- **華やかでエレガントな演出:** 《つばめ》は、パリのサロンやカフェ、ニースの美しいヴィラなど、華やかでエレガントな舞台設定が特徴です。衣装やセットも 19 世紀後半の洗練されたスタイルを反映しており、観客に視覚的な魅力を提供します。

結論

《つばめ》は、プッチーニの作品の中でも独自の位置を占めており、オペラとオペレッタの要素が融合した独特のスタイルが特徴です。愛と自由、自己犠牲のテーマがロマンティックな音楽と共に描かれ、軽やかでありながらも感動的な物語が展開されます。現代においてもその美しいメロディーとエレガントな演出は多くの観客を魅了し続けています。

			初稿:1917 年 3 月 27 日,モンテカルロ歌劇場
1917	3	G.アダー	第 2 稿:1920 年 4 月 20 日,モンテカルロ歌劇場
	幕	ミ	第 3 稿 1924 年 4 月 11 日,ヴェルディ劇場(フューメ)

《外套 (Il tabarro)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全 1 幕のオペラで、プッチーニの 3 部作「三部作 (Il trittico)」の一つです。この作品は、パリのセーヌ川沿いで繰り広げられる暗く悲劇的な物語を描いており、短くも力強いドラマが特徴です。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ
- 台本: ジュゼッペ・アダーミ
- 初演: 1918年12月14日、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場
- 設定: 20世紀初頭のパリ、セーヌ川の船上

《外套》は、プッチーニの「三部作」の最初の作品で、他の二つの作品である《修道女アンジェリカ(Suor Angelica)》と《ジャンニ・スキッキ(Gianni Schicchi)》とともに一夜で上演されることを意図していました。それぞれの作品は異なるテーマとトーンを持っていますが、《外套》はその中でも最もダークで悲劇的な内容です。

主要キャラクター

1. **ミケーレ**: 船の船長で、ジョルジェッタの夫。年齢を重ねた労働者で、妻のジョルジェッタとの関係に不安を感じている。
2. **ジョルジェッタ**: ミケーレの妻。若く美しいが、夫との結婚生活に不満を感じている。若い労働者ルイージと密かに愛し合っている。
3. **ルイージ**: ミケーレの船で働く若い労働者。ジョルジェッタと密かに恋愛関係にある。
4. **フルーゴラ**: 老船員で、占いを趣味にしている。
5. **タルパ**: 船の労働者で、フルーゴラの友人。
6. **タルパの妻**: タルパの妻で、船の上での厳しい生活に耐えている。

あらすじ

プロローグ

物語は、パリのセーヌ川沿いの船上で展開されます。夕暮れが近づき、船の労働者たちが一日の仕事を終えています。ミケーレと彼の妻ジョルジェッタは、彼らの船上生活について語り合いますが、彼らの間には冷たさが漂っています。ジョルジェッタは若い労働者ルイージと密かに愛し合っており、彼女は夫との生活に不満を抱いています。

第一部

- ミケーレはジョルジェッタの心が自分から離れていると感じ、彼女を取り戻そうとしますが、ジョルジェッタは彼に対して冷たく接します。彼女は若く情熱的なルイージとの関係が続けたいと願っています。
- 労働者たちが船の甲板で踊り始め、ジョルジェッタも踊りに加わります。彼女とルイージの間には目に見えない緊張が走ります。ミケーレは彼らの様子を疑わしく見つめます。

第二部

- 船の労働者たちが寝静まった後、ルイージはジョルジェッタと密かに会うための合図として、船の周りに三度の咳をします。ジョルジェッタも彼に返事をして、二人は会うことを約束します。
- ミケーレはジョルジェッタの態度に疑念を深め、彼女が不倫をしているのではないかと考え始めます。彼は外套を羽織り、船の陰で様子を伺います。

クライマックス

- ルイージがジョルジェッタと会うために船の陰に忍び寄りますが、ミケーレに見つかってしまいます。激怒したミケーレはルイージを問い詰め、彼を殺害してしまいます。
- ミケーレは死体を自分の外套で包み、ジョルジェッタに真実を見せつけるために呼び寄せます。ジョルジェッタが外套を開くと、そこには愛するルイージの死体が隠されています。彼女は恐怖と絶望に叫び声を上げ、幕が降ります。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《外套》の音楽は、プッチーニ特有の劇的な表現力と感情の高まりが際立っています。オーケストラの響きは、パリのセーヌ川の冷たさやキャラクターの内面的な苦悩を巧みに描写しています。特に、ミケーレが外套に身を包みながらジョルジェッタを待つ場面では、音楽が緊張感を高め、悲劇的な結末へと導いていきます。

- **テーマ:** 《外套》の主要テーマは、愛、嫉妬、裏切り、そして絶望です。ミケーレの嫉妬と疑念が、彼を愛と絶望の境界線へと追い詰め、最終的には暴力的な行動へと駆り立てます。また、ジョルジュッタの若さと自由への渴望、ルイージとの情熱的な関係が、悲劇を引き起こす要因となっています。物語全体を通じて、人間の本能的な感情とその破壊力が浮き彫りにされています。

舞台演出と視覚的要素

- **リアルな設定と陰鬱な雰囲気:** 《外套》の舞台は、パリのセーヌ川沿いの船上という閉ざされた空間であり、登場人物たちの感情の高まりを強調しています。夜の闇と川の冷たい水面が、舞台全体に陰鬱な雰囲気をもたらし、視覚的にも感情的にも観客に強い印象を与えます。特に、クライマックスでの外套を使った演出は、緊張感と衝撃を視覚的に効果的に表現しています。

結論

《外套》は、プッチーニの「三部作」の中でも最も暗く劇的な作品であり、短い時間で強烈な感情のドラマを描いています。愛、嫉妬、裏切りという普遍的なテーマが、人間の内面的な闘争を通じてリアルに描かれ、プッチーニの音楽と相まって観客に深い印象を残します。この作品は、現代でも多くのオペラファンに愛され続けており、その劇的な力強さと感情の深さが評価されています。

1917	1 幕	G.アダー ミ	1918年12月14日, メトロポリタン歌 劇場	三部作第1 部
------	--------	------------	--------------------------------	------------

《修道女アンジェリカ(Suor Angelica)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全1幕のオペラで、彼の「三部作(Il trittico)」の2番目の作品です。この作品は、宗教的なテーマと母性の愛を中心に描かれ、悲劇的な結末が特徴です。オペラの物語は、神に仕える修道院で孤独に生きる修道女アンジェリカの内面の葛藤と絶望を描いています。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ
- 台本: ジョヴァッキーノ・フォルツァーノ
- 初演: 1918年12月14日、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場
- 設定: 17世紀のイタリアの修道院

《修道女アンジェリカ》は、プッチーニの「三部作」の中で唯一、全員が女性のキャラクターで構成されています。このオペラは、プッチーニ自身の家族生活や宗教的な経験が反映されていると考えられています。特に、母性愛や罪、贖罪といったテーマが強く描かれています。

主要キャラクター

1. **修道女アンジェリカ**: 主人公の修道女で、過去に不祥事を起こして修道院に送られた貴族の娘。彼女は修道院生活を送りながらも、外の世界に残してきた息子のことを思い続けている。
2. **公爵夫人**: アンジェリカの叔母で、冷酷で厳格な女性。アンジェリカを修道院に送った張本人で、彼女の息子に関する重要な情報を持っている。
3. **修道院長**: 修道院の指導者で、アンジェリカの行動を監督する役割を果たす。
4. **他の修道女たち**: 修道院でアンジェリカと共に生活する修道女たちで、背景の合唱としてオペラ全体に参加。

あらすじ

プロローグ

オペラは、修道院の静かな日常の中で幕を開けます。修道女たちは日常の仕事や祈りをしながら、安らかな生活を送っています。しかし、アンジェリカは心の中で息子のことを忘れることができず、常に彼のことを考えています。

第一部

- 修道女たちが修道院の庭で集まり、季節の移り変わりについて話し合っています。彼らは自然や神への感謝を歌い、清らかな生活を楽しんでいます。しかし、アンジェリカは内心で苦しみ、息子に会いたいという思いが募ります。
- ある日、アンジェリカの叔母である公爵夫人が修道院を訪れます。公爵夫人は、アンジェリカの家族の遺産相続に関する書類にサインを求めるためにやってきました。アンジェリカは息子のことを尋ねますが、公爵夫人は冷たく、息子がすでに2年前に亡くなったことを告げます。アンジェリカはこの知らせに衝撃を受け、絶望に打ちひしがれます。

クライマックス

- 息子の死に耐えられなくなったアンジェリカは、自殺を決意します。彼女は修道院の薬草を使って毒薬を作り、それを飲みます。しかし、毒が回り始めた後に、彼女は自殺が罪であることを思い出し、神に赦しを請います。
- アンジェリカの祈りが続く中、奇跡が起こります。彼女の息子の幻影が現れ、彼女を天国へ導くために迎えに来ます。アンジェリカは息子と再会できるという希望を抱きながら、静かに息を引き取ります。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《修道女アンジェリカ》の音楽は、プッチーニ特有の美しいメロディーと深い感情が込められています。オーケストラの響きが、修道院の静けさとアンジェリカの内面の葛藤を巧みに表現しています。特にアンジェリカが息子の死を知った後のアリア「Senza mamma(母のいない子供)」は、プッチーニの全作品の中でも最も感動的な一場面として知られています。
- **テーマ:** このオペラの主要テーマは、母性愛、罪、贖罪、そして奇跡です。アンジェリカの深い母性愛が物語の中心にあり、彼女の行動と決断が全て息子への愛によって導かれています。また、罪の意識とその贖罪、最後に奇跡によって救われるという宗教的なテーマが作品全体を通じて描かれています。

舞台演出と視覚的要素

- **修道院の静けさと暗い雰囲気:** 《修道女アンジェリカ》の舞台は、修道院の庭や礼拝堂という静かな場所が設定されています。修道院の閉鎖的な雰囲気がアンジェリカの孤独と内面的な苦しみを強調し、観客に彼女の心情を深く理解させます。また、最後の奇跡の場面では、光の効果や視覚的な演出がアンジェリカの天国への昇天を象徴的に表現します。

結論

《修道女アンジェリカ》は、プッチーニの「三部作」の中でも特に感動的で、宗教的なテーマが深く描かれた作品です。短いながらも強烈なドラマが展開され、母性愛と罪の贖罪という普遍的なテーマが観客の心を打ちます。プッチーニの音楽が、アンジェリカの感情の波を巧みに表現し、最終的な救済と希望のメッセージがオペラ全体に力強く響き渡ります。この作品は、現代でも多くのオペラファンに感動を与え続けています。

1918	1 幕	G.フォルツァ ーノ	1918年12月14日、メトロポリタン 歌劇場	三部作第2 部
------	--------	---------------	----------------------------	------------

《ジャンニ・スキッキ (Gianni Schicchi)》は、ジャコモ・プッチーニ作曲の全1幕のオペラで、彼の「三部作 (Il trittico)」の最後の作品です。このオペラは、コメディと人間の欲望、機知が巧みに組み合わせられた作品で、イタリアの喜劇的な要素とプッチーニの音楽が融合しています。

概要と背景

- **作曲者:** ジャコモ・プッチーニ
- **台本:** ジョヴァッキーノ・フォルツァーノ
- **初演:** 1918年12月14日、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場
- **設定:** 14世紀のフィレンツェ

《ジャンニ・スキッキ》は、プッチーニの「三部作」の中で最も軽快でコメディックな要素が強く、喜劇的な状況が展開されます。このオペラは、アット・ホーム・コミディーの要素とプッチーニの音楽の両方を楽しめる作品です。

主要キャラクター

1. **ジャンニ・スキッキ**: 主人公で、機知に富んだ詐欺師。家族の金銭的な問題を解決するために巧妙な計画を立てます。
2. **ラウレンツィオ**: スキッキの娘の婚約者で、金銭的な利益を得るためにスキッキと共に計画を立てます。
3. **ビアンカ**: スキッキの娘で、ラウレンツィオと結婚する予定です。
4. **ゼッピ**: 金持ちの死者で、遺産相続問題の中心となるキャラクター。
5. **リナ**: ゼッピの妻で、財産を争う家族の一員。
6. **他の家族たち**: ゼッピの家族で、遺産を巡る争いに巻き込まれる。

あらすじ

第一部

- 物語は、金持ちのゼッピが死んだ後、彼の遺産を巡る家族の騒動から始まります。ゼッピの家族は遺産を手に入れるために互いに争っていますが、遺言状がないため、遺産の分配が難航しています。
- スキッキは、家族の中で唯一の解決策を持つ者として現れます。彼は家族の混乱を利用して、自分とラウレンツィオ、ビアンカの利益を得る計画を立てます。

第二部

- スキッキは、ゼッピの家族に対して自分がゼッピの後見人であり、遺産を管理する権限があると主張します。彼は遺産の分配を公正に行うために、家族全員を集めて遺言書を書くと言います。
- スキッキは、ゼッピの家族に対して遺言書の作成を急がせる一方で、自分とラウレンツィオの利益を確保するために巧妙な手口を使います。彼は遺

言書に自分たちが望む内容を書き込み、遺産を乗っ取る計画を実行します。

クライマックス

- スキッキは、遺言書に自分とラウレンツィオが名義人として記載されていることを公表し、家族の驚愕と怒りを引き起こします。家族はスキッキに対して反発し、彼の計画が明らかになります。
- スキッキは家族から逃げる準備をし、最終的には成功裏に自分たちの利益を確保します。彼は遺産を手に入れることができ、自分の計画が成功したことを喜びます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《ジャンニ・スキッキ》の音楽は、プッチーニの他のオペラに比べて軽快で愉快的なメロディーが特徴です。コメディックな状況に合った音楽が使われ、特にスキッキの登場シーンや計画が進行する場面では、明るく活気のある音楽が展開されます。
- **テーマ:** このオペラの主要テーマは、欲望、詐欺、そして機知です。遺産を巡る争いが中心の物語であり、スキッキの詐欺によって家族の混乱がさらに深まります。プッチーニはこのテーマをユーモラスに描写し、観客に楽しさと風刺を提供しています。

舞台演出と視覚的要素

- **喜劇的な演出:** 《ジャンニ・スキッキ》の舞台は、フィレンツェの家の内部が中心であり、家族の騒動と混乱を表現するために、視覚的に活気ある演出が行われます。家族の争いをコミカルに描き、スキッキの詐欺計画が中心に展開します。衣装や舞台美術は 14 世紀のイタリアの雰囲気や時代背景を反映し、時代背景を表現しています。

結論

191 1 G.フォルツァ 1918年12月14日,メトロポリタン 三部作第3
8 幕 ーノ 歌劇場 部

《トゥーランドット (Turandot)》は、ジャコモ・プッチーニが手がけた最後のオペラであり、その独特な音楽と劇的なストーリーで広く知られています。プッチーニがこの作品の完成を見届けることなく亡くなったため、最終幕はフランコ・アルファーノによって完成されました。以下は、《トゥーランドット》**の詳細な内容とその背景についての説明です。

概要と背景

- 作曲者: ジャコモ・プッチーニ(未完のまま死去し、フランコ・アルファーノが完成)
- 台本: ジュゼッペ・アダーミとレナート・シモーニ
- 初演: 1926年4月25日、ミラノのスカラ座にて
- 設定: 古代中国の北京

オペラは、冷酷で美しい中国の皇女トゥーランドットと彼女に恋をする求婚者カラフの物語を描いています。トゥーランドットは、彼女に求婚する者に対して三つの謎を出し、解けない者は即座に処刑されるという過酷な試練を課しています。

主要キャラクター

1. トゥーランドット:
 - 中国の皇女。美しく冷酷で、過去の祖先が受けた侮辱のために男性を憎んでおり、求婚者に謎解きを強いる。
2. カラフ:
 - 正体不明の異国の王子。トゥーランドットの美しさに魅了され、彼女に挑戦する。自信に満ちており、勇気と知恵を持つ。
3. リュー:

- ティムールの忠実な奴隷の少女。カラフを愛しており、彼のために命を捧げる。
4. ティムール:
- カラフの父親であり、亡国の王。年老いた視力を失った王。

オペラの構成とあらすじ

第1幕:

- 北京の城門前では、皇女トゥーランドットに求婚するペルシャ王子が処刑されることが宣告されます。群衆は残酷な光景に驚きますが、トゥーランドットの美しさに魅了されています。ペルシャ王子が処刑される前、群衆は彼の命を救おうと訴えますが、トゥーランドットは冷たく拒否します。
- その場に居合わせたカラフは、トゥーランドットの美しさに魅了され、彼女に求婚する決意を固めます。父親のティムールと奴隷のリュウが必死に止めようとしませんが、カラフは鐘を鳴らし、求婚の挑戦を宣言します。

第2幕:

- トーランドットの宮殿で、皇帝の命令により、カラフが謎解きの試練に挑む場面が描かれます。トゥーランドットは、自分の祖先である皇女ルー・リンが敵国の王子に犯されて殺されたという過去の出来事から、男性を憎む理由を語ります。
- トーランドットはカラフに三つの謎を出します。カラフは見事にすべての謎を解きますが、トゥーランドットは彼と結婚することを拒みます。カラフは、彼の名前を夜明けまでに知ることができたら自分を殺しても良いと宣言します。トゥーランドットはその提案を受け入れます。

第3幕:

- カラフの名前を知ろうと、トゥーランドットはあらゆる手段を講じます。彼女はカラフの名を知っている者がいると信じてリュウとティムールを捕らえます。リュウはカラフを守るために自らを犠牲にし、拷問に耐え切れずに命を絶ちます。

- リューの死を目の当たりにしたトゥーランドットは揺さぶられ、カラフの優しさに触れます。カラフは彼女に自分の名前を告げ、彼女の運命を握る選択を彼女に委ねます。
- 最終的に、トゥーランドットはカラフの愛を受け入れ、彼の名前を「愛」と宣言します。彼らは愛によって結ばれ、オペラは勝利と幸福のうちに幕を閉じます。

音楽とテーマ

- **音楽の特徴:** 《トゥーランドット》の音楽は、オリエンタルなメロディと和声が特徴的で、中国の楽器を模したサウンドが取り入れられています。特に有名なのはカラフが第3幕で歌うアリア「誰も寝てはならぬ (Nessun dorma)」で、その力強いメロディは世界中で愛されています。
- **テーマ:** オペラのテーマには、愛と犠牲、そして復讐と赦しが含まれます。トゥーランドットの心の変化は、冷たさから愛情へと変わる過程を描いており、愛の力がいかに人を変えるかを示しています。リューの無私の愛と犠牲は、オペラ全体の感情の中心となっており、観客に強い印象を与えます。

舞台演出と視覚的要素

- **豪華な舞台装置:** 《トゥーランドット》は、その壮大な舞台美術や豪華な衣装でも知られています。宮殿のセットや群衆シーンは、視覚的に魅力的で、異国情緒を感じさせます。伝統的な中国の衣装や装飾が施され、オペラ全体に異文化の雰囲気を与えています。

結論

《トゥーランドット》は、プッチーニの音楽的才能とドラマチックなストーリーテリングの結晶であり、オペラ愛好者にとって欠かせない作品です。その感動的な音楽、特に「誰も寝てはならぬ」のアリアは、聴衆に深い印象を与え続けています。愛と犠牲のテーマを通じて、普遍的な人間の感情を描き出すこのオペラは、時代を超えて愛され続けています。

1925

3幕5 L.シモーニ,G.
場 アダーミ

1926年4月25
日,スカラ座

未完、フランコ・アルファ
ーノ補筆完成
ベリオによる補筆版あり
(2002年)